

避難所における良好な生活環境の確保に関する第2回検討会（H24.11.12）

「東日本大震災、吉里吉里小学校の避難所運営の実態と教訓」

大槌町立吉里吉里小学校 前校長 佐藤 良
(奥州市立胆沢愛宕小学校 校長)



吉里吉里小学校の校舎



大震災前の吉里吉里の様子

1 大震災の被害と直後の様子

岩手県上閉伊郡大槌町は、陸中海岸中央から少し南に位置する太平洋に面している町である。東日本大震災による人的被害は死者行方不明者合わせて、約1,700名、この時期の当町の人口が約15,000名であったので、人口の約11%が人的被害に遭われたことになる。町長以下、役場職員の方々も犠牲になり、まさに甚大な被害であった。

吉里吉里地区は、大槌町の中心部から山を一つ越えた北部に位置し、やはり海に面した地区である。大槌町立吉里吉里小学校は、平成23年3月11日時点で学級数7（普通学級6、特別支援学級1）、児童数154名、教職員（非常勤職員を含め）18名の学校である。吉里吉里地区（浪板も含む）では、東日本大震災により、大槌町の中心部ほどではないが死者・行方不明者110名を越え、住宅地のおよそ半分が流され、主産業だった漁業も壊滅的な被害を受けた。ただ、本校は、高台（海拔29m）に位置していたことが幸いし、津波の被害を免れ、児童・教職員の人的被害は皆無であった。（しかし、家族が犠牲になってしまった児童・教職員が多数）

大震災直後の学校の様子は、次の通りである。3月11日(金)14:46、五時間目の授業の途中、突然、私の携帯電話に緊急地震速報が流れた。「宮城沖で地震発生 強い揺れに備えてください(気象庁)」。さっそく、職員室のテレビのスイッチを入れた。NHKでは緊急地震速報が流れていた。数秒後、とんでもない地震が本校校舎をゆさぶった。すぐ、副校長が、校内緊急放送をしようとしたが、電源が切れ対応できなかった。もちろん、テレビも蛍光灯も電源が切れた。副校長ら職員室にいる職員が、職員室前廊下から大声で「机の下にもぐるように」と指示を出した。強い横揺れが、数分間続いた。職員室から船越半島をみると、山の土砂が崩れ、半島一帯が土けむりで覆われていた。これは、とんでもない地震だと直感した。地震がおさまり、校庭に避難することにし、各教室に職員室にいる職員が走った。すぐに、児童は、担任引率で、緊張した面持ちで、階段を降りていった。騒いだり、泣き叫んだりする児童はいない。普段の訓練時から「訓練以上のことはできない」と児童に話し、しっかり訓練を行っていたことが、このような非常災害で生きるものだとつくづく思った。日頃の訓練が効を奏したといえる。児童全員の校庭避難を確認し、待機。吉里吉里保育園園児、下校途中の中学生、地域の方々が次々、本校に避難してきた。

15時25分ころ、悪夢のような大津波が吉里吉里地区を襲ってきた。とんでもない光景である。本校が高台に

あるにもかかわらず正門へあと30メートル程のところまで、津波が襲来した。津波による校舎の浸水等は免れたものの、津波によって防波堤は破壊され、再び襲来する津波が学校まで来ても不思議ではない状況になっていた。地震発生とともに学校に避難していた地域の人々とともに、さらに高台にある吉祥寺に2次避難することにした。学校のフェンスを乗り越え、線路を渡り、坂を上り、吉祥寺に到着したのが15時40分であった。

大きな津波襲来の危険がなくなったと判断し、本校に戻ったのが17時過ぎである。



学校付近の被害の様子



三浦知良選手が支援に来ました

2 吉里吉里小学校の避難所運営（学校の対応）

本校は、避難所に指定されているため、大震災当日より津波に襲われた地域の人々が続々とやってきた。ずぶ濡れになりながら命がけで逃げてきた人々、本校の対岸に位置する山田町の船越地区から避難してきた人々等、当日の避難者数は本校児童も含めると450名ほどになった。

避難場所は体育館としたが、津波の負傷者や体調面のケアの必要な方々のために、校舎1階「交流ホール（オープンスペース）」を、校長判断で臨時の救護所（診療所）として使用することにした。ただ、ほとんどは震災のために体調をこわしたり、持病を悪化させたりする方々であった。対応は、本校に避難してきた数人の看護師にもお願いし、不眠不休で看護に当たった。保健室にある薬等は、全部提供したが、医薬品が不足している事態には本当に困った。しかし、救護所設置は、地域の人々の命を守る活動になれたと自負している。

電気も水道も、そして電話もすべて不通になり、ライフラインは寸断された。暗くて寒い夜を覚悟したが、偶然、本校の校庭に数台のバスが避難していた。バスのエンジンを利用して自家発電を行った。ある程度の電気使用は可能になり、体育館に灯りをとともすことができた。学校からは、ジェットヒーター2台と灯油などを提供し、体育館の暖房にも役立ててもらった。また、被災しなかった地区民より、おにぎり等の提供もあり、真っ暗で寒く空腹の中で過ごす事態は避けられた。

校門のすぐ近くまで津波に流された家や車等があり、一日や二日だけの避難所ではないことは明らかであった。また、町の行政機能が麻痺しており、中長期的な避難所運営が吉里吉里小学校に求められることになった。

本校教職員は、いろいろな事情を抱えながらも震災時から避難民対応を精力的に行った。震災後4・5日は文字通り昼夜を問わずの対応であった。その後、毎日（土日を含めて）のシフトを決め、3月15日ごろからは、夜間常勤3人、20日から2人が対応にあたった。3月末まで、この体制で対応した。管理職は、常時学校に宿泊し、避難民と寝食を共にした。それが、避難所が閉鎖される4月末で続いた。本校教職員が常駐していることで、多くの方が安心感をもったようである。

しかし、本校教職員だけで避難民の対応は、やはり無理があり困難である。また、避難民が本校教職員に頼りきる事態だけは避けたいと考え、次のように避難所運営の基本を考えた。

- 1 避難所は、避難してきた地域の方々を中心になって運営にあたる。避難する場から生活する場へ。
地域の人々が中心の避難所運営の組織をつくり、そのうえで分掌ごとに班をつくり、リーダーを決めてもらう。教職員が避難所運営で手一杯になり、子どもたちの教育に目を向けられない事態を回避する。
- 2 学校は、校舎の管理と保健衛生面（衛生状態）、マスコミ対応を担当する。特に、感染症の蔓延に細心の注意をはらう。
屋上プールからの水の運搬、体育館（避難所）・トイレの清掃、炊事等の実動部隊は、地域の方々が行う。
- 3 避難所は体育館のみとし、校舎は救護所、炊事場、会議室、物資保管室とする。
教育の場を確保する。

さっそく、避難してきた地域のリーダーたちと話し合い、避難所運営と役割分担、校舎使用について協議した。私の考えは、快く受け入れられ、震災後、すぐに吉里吉里小学校避難所運営本部が設置された。主な組織は、本部

長（1名）、副本部長（校長も含め数名）、総務班（本部会議・記録・連絡）、被災者管理班（名簿管理・問い合わせ対応）、情報班（情報収集・発信・伝達）、食料班（炊き出し・食糧受入・配給）、燃料管理班（燃料管理・配給）、施設管理班（防火・防犯・ゴミ・トイレ）、保健衛生班（医療・介護）、ボランティア班（受入・管理）とした。学校は、特に総務班、施設管理班、保健衛生班と密接な連携を取りながら避難所運営にあたっていった。

私も副委員長に任命され、毎朝、避難所運営本部会が行われた。その後の運営状況は、自主的な予想していた以上の素晴らしい活動ぶりであった。特に、地区の若い男性の動きには驚かされた。避難所の受付事務や水の運搬等、昼夜を問わず積極的に動いてくれた。また、本校家庭科室を使い、地域の女性を中心に炊き出しが行われ、避難民への一日3食の準備から、自宅避難者への食事の配給まで一手に引き受け、文字通り精力的な活動であった。本当に頼りになった。

地震発生の翌週に盛岡赤十字のスタッフが本校を訪れた。救護所とトイレ等を見た後、「こんなに衛生状態のよい避難所はない。県の衛生部にも話しておきます。」と述べていただいた。長い避難生活で体調を崩す方々も出てきた。そのような方々も含め、避難所内の感染症の拡大を防止するための施設として機能した。

本校は、4月20日始業式が行われ、25日入学式、26日から被災した大槌の3小学校を受け入れ、本校校舎に4つの小学校でスタートした。

本校の避難所が閉鎖されたのは、4月30日である。

3 避難所運営の教訓

学校という教育機関が避難所になる場合の教訓を私見で、的外れであるが、少しだけ書かせていただきたい。

(1) 避難所における要援護者等の対策について

- ・救護所（診療所）の設置は非常に迷った。それは、本校は避難所の指定にはなっていたが、救護所（診療所）設置の指定にはなっていなかったからだ。避難所の状況から校長判断で設置したが、当初は臨時的なものと考えていた。しかし、震災のために体調をこわしたり、持病を悪化させたりする方々が多く、また、DMATの方々がお出でになり、常設となり、避難民以外も救護所を訪れるようになった。地域の人々の命を守る活動に貢献できたが、私自身、いろいろなことを想定すると不安感がつきまとった。救護所（診療所）は、避難所閉鎖まで設置された。確かな行政機関の支援がほしい。

(2) 地域防災計画における避難所計画について

- ・まずは、普段から地域・保護者と学校が、しっかりとした想定のもと、避難訓練を継続して行わなければならない。子どもたちに常に話していることであるが、「訓練以上のことはできない」ことを地域の方々にも周知し、災害時と同じ気持ちで訓練を行う体制が大切である。
- ・本校では、震災時、児童の引き渡しは行わなかった。家族の引き渡し要請については、きっぱりと断った。本校の災害時のマニュアルに、津波警報発令中は、児童の引き渡しを行わないことを明示し、教職員の共通理解が図られていた成果である。保護者にも周知していたものの、非常時には保護者等の中には、考えられない行動をとる方もあり、保護者だけでなく地域の方々への周知が必要である。
- ・学校は、校舎の管理と保健衛生面（衛生状態）、マスコミ対応を担当する。特に、感染症の蔓延に細心の注意を払いたい。水の運搬、避難所・トイレの清掃、炊事等の実動部隊は、地域の方々が行うよう要請する。長期の避難所になる場合、平常時の避難所計画等に、役割分担を明示し、地域や学校に周知させる等、啓発活動が必要である。
- ・学校は、教育の場である。やはりそれを第1としたい。避難民の人数にもよるが、避難所はなるべく体育館を原則とし、校舎は救護所、炊事場、会議室、救援物資保管室等にし、なるべく避難民の生活の場とならないようにする。

(3) 避難所における備蓄の状況について

- ・震災時の三月ごろの避難所で、一番必要なものは、食料と言うより、水と燃料であった。衛生状態を悪くしないためには、トイレや避難所を常に清潔にしておかなければならない。そして、寒さが特に高齢者には一番こたえる。とにかく、水と燃料の確保が大切である。本校屋上のプールは、本当に役立った。常に栓をひねるとプールの水を使用できる環境はありがたかった。
- ・本校の校庭に避難してきた数台のバスのエンジンを利用して自家発電を行ったが、いつもこのような偶然をあるわけではない。避難所になる学校には、自家発電装置設置が肝要である。もちろん、毛布等の常備は絶対必要である。本校の非常災害用物置には、毛布が震災前より置かれ、非常に役立った。

(4) 避難所の運営について

- ・町の行政機能が麻痺したため、避難所の運営は、吉里吉里小学校独自で判断しなければならない状況になった。学校組織は、他の行政機関の組織体系が異なるとよく言われるが、非常時には、この学校組織体制の方が精力的に動きやすい。校長の判断で、全教職員が次々と機能的、精力的に対応できたのである。自

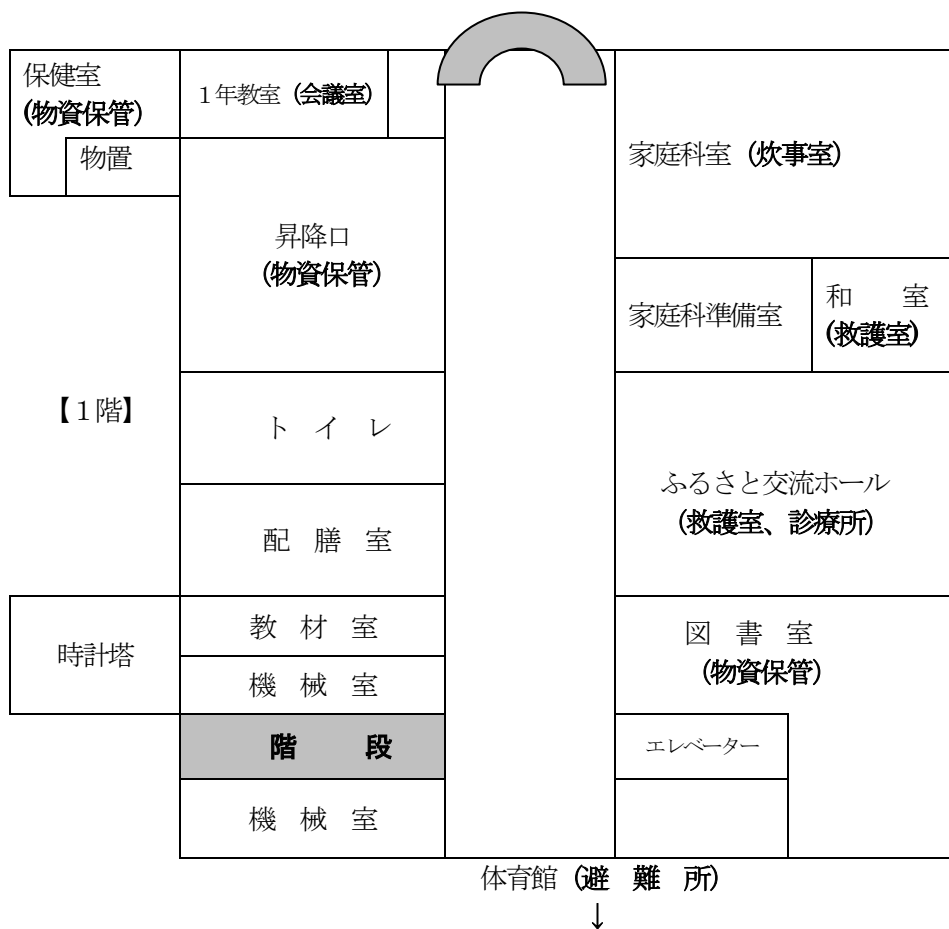
分の仕事の範疇ではないなどと言うものはいなかった。学校教職員は、優れた能力を持っているものが多い。この人材を避難所運営において大いに活用できる。

- ・教職員だけで避難民の対応は、やはり無理があり困難である。また、避難民が教職員に頼りきる事態だけは避けたい。避難から生活する場になることを、理解してもらうため避難所は、避難してきた地域の方々を中心に運営にあたることを原則としたい。教職員が避難所運営で手一杯になり、子どもたちの教育に目を向けられない事態を回避したい。

(5) 避難所の開設・閉鎖に伴う諸問題について

- ・避難所の開設より閉鎖が難しい。新聞等で避難所閉鎖に伴うトラブルや軋轢が報道されているが、避難民の理解を十分得られるスムーズな閉鎖は、どの避難所でも難しい。特に学校施設は、いろいろな施設・設備が完備し、ある面では快適である。学校の避難所から次の避難所に移ってもらう場合、学校避難所より不自由な生活を余儀なくされることが多い。吉里吉里小学校もまさにその通りであった。しかし、町内の他の小学校が全て被災し、校舎として使用できる学校は本校のみである。吉里吉里の子どもだけでなく、大槌町の子どものための教育のためにという願いを、何とか受け入れていただき、4月末日をもって、他の避難所等に移動していただいた。ただ、教育の場の確保や学校は教育をする場だからでは、避難されている人々の理解は得られないと考える。それは、1か月半程の学校教職員の献身的な対応があったからではないかと思う。「今まで、本当にお世話になった。学校の子どものために自分たちもまたがんばるよ。」「今までお世話になった。先生方ありがとう」という言葉を多くの方よりかけられた。立場を同じにして、お互いを思いやる心の交流があるからこそ、大きなトラブルにならずに済んだと考える。今回は、このような状況であったが、今後のことを考えると、学校施設の避難所の使用期間の原則は、あらかじめ設定しておいた方がよい。

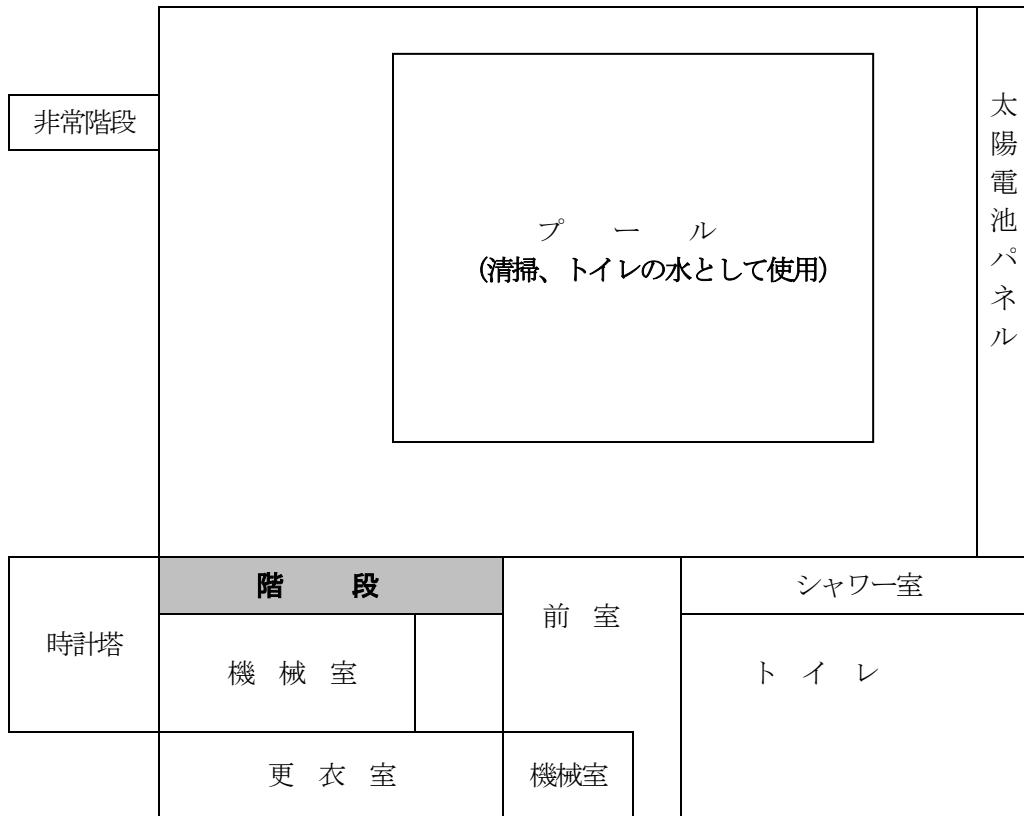
吉里吉里小学校避難所使用教室配置図



【 2 階 】 3年教室 (物资保管) 理科室 (貴重品保管)

【 3 階 】 使用せず

【 4 階・屋 上 】



(参考資料)

学校再開に向けて

学校再開を次のように考えた。

- ・ 卒業式の挙行（学校行事の復興）
- ・ 本校の再開のための方策

まずは卒業式の挙行である。震災のため、小学校生活の区切りである卒業式を予定通り行うことができなかった。学校に避難している保護者の願いは、「どんな形でもよいから、とにかく卒業式を行ってほしい。」であった。私も卒業式をする考えは同様であったが、一生の中で一度きりの小学校の卒業式を簡単な形で終わらせたくはなかった。さっそくこの考えを教職員に伝えた。震災後、忙しく本校の避難所の世話等をしていた教職員も、疲れをものともせず賛同してくれた。本校職員の意識の高さに感激した。卒業シナリオの変更、会場の変更（避難所の関係で視聴覚室で行う）、生花や記念写真の手配等を行った。特に、卒業写真だけは、何とかとりたいたいと思った。それは、児童の多くが大津波のため思い出の写真がすべて流されてからだ。何とか卒業写真だけは残したかった。

当日は、6年生全員が出席した。証書授与時のきりっとした姿勢、歯切れよい返事、思いをしっかりと伝えられたよびかけや合唱、練習不足を感じさせない内容であった。卒業式ができないのではないかと心配していた卒業生の何ともいえないホッとした表情が印象的であった。そして、保護者だけではなく家族で出席する方々もあり、学校の対応に感謝の言葉を述べる方が多かった。もちろん全員（卒業生・教職員・家族）で卒業写真をとったのはいうまでもない。

平成23年度の教育活動の始まりが遅れることは仕方がない。しかし、子どもたちの生活状況が心配で、しかも学校再開後、スムーズに児童が対応できるか不安であった。そこで、4月の毎週木曜日を登校日（登校できる児童だけ、無理をしないようと連絡する）と設定した。児童が登校できるか心配したが、杞憂であった。在校生だけでなく卒業生までも9割方、登校した。「早く勉強がしたい」「早く友だちと遊びたい」等々、どの児童も、学校再開が待ち遠しい様子である。『学校再開が一番の児童の心のケア』だと再認識させられた。また、数ヶ所の避難所を訪問し、児童の状況の把握にも努めた。4月の下旬より学校を再開させたが、学校不適應の児童は、未だに出現していない。震災時の学校の対応が効を奏したと考えている。



無事、卒業記念写真をとることができました。【本物の記念写真は、もっと上手にとっています。

本校校舎に4つの小学校でスタート

町教委から本校校舎で4校の小学校が共に学習していく方針が示された。予想されていたことで、驚きはしなかった。それよりも大槌町の各小学校再開への協力を考えていたので、当然のことであった。

まず、4校がそれぞれの学校経営（教育活動）を行うことが児童の心のケアにつながると考えた。それは、当該学校の教員がそれぞれの学校の児童のことを一番知っているからだ。児童のちょっとした心の不安等にも対応できる。町教委も他の校長先生方も同様の考えで、ありがたかった。また、教職員間の共通理解と協力関係が必要と考え、数度の全体会、それぞれの職ごとの会議（校長会、副校長会、教務主任会、生徒指導会、学年会）を度々行った。不自由な面も多かったが、学校再開の原動力となった。

時間割は学年ごとに4校統一のものを作成した。授業自体は基本的に学校ごとに行われた。体育は、校庭のスペースの関係で4校合同授業としたが、他の教科でも、2校あるいは3校合同で授業するなど児童の実態を考慮し、積極的に動く教職員集団となった。そして、学校再開の中で見せる子どもたちの笑顔が、教師のやりがいや生きがいとなった。教師も児童も、一見この手狭で不便な本校校舎でも、学校再開の喜びが本当に大きかった。また、休み時間には子供たちの学校の垣根を越えた交流も見られ、そうしたかかわりの中で、子どもたちには、社会性や他人を思いやるといった成長が見られた。職員室は各校ごとにしたが、同じ校舎で学校生活を送っているのも、休み時間等には異なる学校の児童が共に活動

する様子が見られてきた。各校の生徒指導主事を中心に生徒指導上の問題は共通理解するよう努めた。また、校長同士が度々集まり情報交換や共有を、毎日昼には副校長が集まる機会を持つなど、学校間の連携を深めた。複数校による合同授業等により他校の授業を見合う機会があり、教職員の研修の場ともなった。

通学は、本校以外の3校の児童は距離があるため大型バス（スクールバス）による通学が行われた。学校周辺は、道幅が狭く、児童の乗降、バスの駐車は校庭で行わなければならなかった。そのため、本校の児童に対する登下校時の安全確保が課題となった。登校時に危険な地点に教職員が立ったり、下校時にはスクールバスが発してから本校児童を下校させたり等の工夫が行われた。また、通学路の周辺にはまだ瓦礫が残されていたので、マスクの着用を指導した。

このような4校の合同の学校生活は、当初2ヶ月程度の暫定的なものという話であったが、仮設校舎の建設が遅れ、9月中旬まで続いた。

学校復興は行事から

9月中旬まで「本校校舎に4つの学校」が続き、本校単独で学校が再開したのは、9月20日からである。1年生が1年生であるのは今年だけであり、6年生も6年生であるのは今年だけである。したがって、かけがえのないこの1年を大事にするため、例年行われていた行事は、是非行いたいと考えた。

まず、例年は春に行われていた運動会を10月1日に開催することにした。児童会は、『団結し、希望の光を 吉里吉里に』のスローガンを考えた。本校は、地域に支えられてきた学校である。震災のため地域に大きな被害が出たが、運動会では、元気、やる気、熱意を地域に発信し、少しでも地区に希望の光を輝かせていきたいと考えてくれた。児童の力を結集し輝きのある運動会にすることこそ、地区を明るくできると信じた。当日は、短い期間ながら、常に練習を真剣にやっていた様子があらわれていた。感動した、元気をもらった、という声が数多く寄せられた。

続いて、10月29・30日には、吉里っ子文化祭を行った。29日は、郷土芸能発表会・支援コンサートを行った。特に、津波で多くの楽器等を流された中で、郷土の芸能を愛する地域の方々や保護者の熱意により、郷土芸能発表会を開くことができたことは特筆に値した。指導して下さった関係者に対し、心より御礼を申し上げたい。30日はステージ発表会。学年ごとにめあてをもち、地道に練習に取り組む子どもたちであった。劇や音楽劇・合唱合奏、どの学年の演目も見応えのあるものだった。運動会同様、賛辞を述べる方々が多く、私自身もやり遂げた喜びでいっぱいであった。

1ヶ月の間に二大行事を開催するという、いかにも無謀な取り組みだったかもしれない。しかし、予想以上の成果としてあらわれた。それは、子どもたちの目的意識が、やる気と努力と集中力に具現化されたからである。もちろん、教職員の熱心な指導が子どもたちの素晴らしい動きとしてあらわれたのはいうまでもない。

二大行事によって培った能力は、授業でも自信となってあらわれている。震災後も、子どもたちの学習能力は着実についている。



吉里っ子文化祭（郷土芸能発表会）



吉里っ子文化祭（ステージ発表会）